

みな母の胎にて養はれしかば力士の腹に小さき臍あり
（八尾市）水野 一也
少子化で「伯仲叔季」の言葉さへだ辞苑より消えてゆくかも
（坂戸市）納谷香代子
九十五歳の女性は「故郷」三番まで記憶のま
まに笑みつつ歌う（アメリカ）ダンバー悦子
☆人の他はおおかた裸足という地球ガザの子ど
もらおおかた裸足（大和郡山市）四方 護
今ならばやなせたかしは描きにけんガザの空
飛ぶアンパンマンを（君津市）内川 英夫
トウエントヒュッシー（富山市）松田 わこ
秋になり指が欲張り動き出すパッパ、ベ
この夏も生き延び得たり冷房という不自然の
力を借りて（藤沢市）朝広 彰夫
診察をまつ間の読書すがすがし二時間あまり
も没頭できて（盛岡市）山内 仁子
「大丈夫」はノサンキューの同意語でいつ
でも孫は返事に使う（長野県）御子柴妙子
大島へ修学旅行に行く時に平和の誓い言う
役になる（奈良市）山添 聡介

【評】1 首目、立派な体格の力士の腹に、母の胎内にいた時の名残りの臍を見て親しみを覚えたのだ。2 首目「伯仲叔季」はそれぞれ長男・次男・三男・末弟を指す言葉。3 首目、遠い故郷を思って女性はこの頃を何度も歌って来たのだろう。

☆人の他はおおかた裸足という地球ガザの子ど
もらおおかた裸足（大和郡山市）四方 護
☆小国川に下り築という季語ありて落ち鮎光る
ふるさとの秋（仙台市）沼沢 修
利根川と吾妻川の寄り合る「落合築」に落
鮎を食ふ（前橋市）荻原 葉月
三四郎一人それから門を出てころはすまず
道草を食う（京田辺市）大島 智雄
秋茄子と「こだけ」の話し置いてゆく向かい
の老女の日焼けした肌（丸亀市）金倉かおる
本国の騒乱胸に常どおり留学生はゴミ出して
ゆく（高崎市）小島 文
ベンガル人の若き夫婦は夕道に少なき言葉
小さく交す（多摩市）豊間根則道
当世は掛け声かけて担がない子供神輿は台車
に乗せて（神戸市）安川 修司
婚家ゆえ父の遺影は飾れない鏡台の中に軍服
の父（茨木市）窪田 宣子
「この電話ははれてません」而して友の死
を知る秋の日の午後（東京都）上田 国博

【評】四方さん、なるほど靴を履いているのはヒトだけ。その靴も履くことができないガザの子供たち。二・三首目は築にかかった落鮎を、いい季節だ。「下り築」「落合築」の呼び名に風情が。大島さんの一首、漱石のタイトル幾つかわかる？

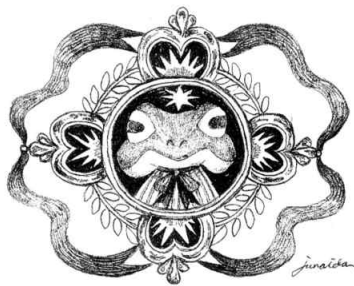
烈風に小屋潰れしに鶏はわずかの隙間で啄み
やめず（羽村市）川元 源一
☆人の他はおおかた裸足という地球ガザの子ど
もらおおかた裸足（大和郡山市）四方 護
若者は現場任せゴルゴタのイエスのごとし
鋼材背負う（東京都）福島 照子
認知症になってもあの人自分を生きていて
コスモス揺れて（札幌市）赤坂 京子
水槽を覗き込むごとわれの顔をじっと見つめ
る施設の母は（下野市）小田部 秀
今しがた掴んだ鮎の焼かれるをなにおも
か子らの見ており（大津市）阪倉 隆行
オートバイ、軽三、軽四と乗り継ぎて父の最
期はベントリムジン（加東市）藤原 明
☆信号が変わった後もたちこめる豚の匂いとあ
の叫び声（厚木市）本庄 伸子
二階からのぞめば龍はのたうちてウオーと鳴
くがに美称線廃止（美称市）伊藤 和子
あの頃の1・4・14・2・13・5・6何だったんだ
学生時代（香川県）藤井 哲夫

【評】一首目、鶏の凄まじい生命力だ。二首目、人らしい生活を奪われた子らの裸足。三首目、重責と鋼材の重さが十字架に見える。五首目、まるで異世界の生物を見るような母のまなざし。十首目、終わりのない数字は浪費した青春のよう。

滑り台から登りたがる子に窮屈な世のルー
ル教える（ひたちなか市）安澤 美幸
☆信号が変わった後もたちこめる豚の匂いとあ
の叫び声（厚木市）本庄 伸子
新米ときこの汁との夕飯に半膳残しTKGに
するよ（八街市）渡辺 昭江
キッチンのリフォーム間近三十年毎日使った
流しを磨く（八王子市）藤原 弘子
職場ではチョーク家では猫の毛が濃色の服を
着られぬ理由（名古屋市）百々 奈美
営業用スマイルゆつくり消してゆく十九時半
の電車の中で（金沢市）竹内 一二
「歩きなさい」と医者が言うので靴を穿く私
はいつも形から入る（春日井市）神戸 豊子
雨あがりの更地に集うアゲハチョウ避難訓練
しているみたい（東京都）富見井高志
秋の田にぼつんと二つ案山子あり雀の憩う止
まり木として（蕨崎市）望月 美良
☆小国川に下り築という季語ありて落ち鮎光る
ふるさとの秋（仙台市）沼沢 修

【評】第一首、すべり台は上から滑り降りるのが世のルール。「窮屈」に、作者の思いがこもる。第二首、町中を通った豚の運搬車。匂いと声だけに焦点を絞って、過ぎ去った余韻をうたう。第三首、「TKG」は「卵掛けご飯」の意味。

朝日歌壇俳壇



〈日曜日のブローチ 26〉 junaida

うたをよむ「選者ととともに」の特選句

「朝日俳壇の選者とともに」という読者参加の催しが、9月23日の秋分の日、東京都内の朝日カルチャーセンター新宿教室で開かれた。参加者は、会場とオンラインを合わせて59人。1人2句まで出句してもらい、4人の選者がそれぞれ特選5句と入選10句を公開で選句した。
長谷川権さんの特選1席は「恐竜の時代はさらに天高し 栃木県壬生町・あらゐひとしさん」。長谷川さんは「巨大な恐竜が天に向かって首を伸ばしている。高山さんの特選1席は「へためらわず天

牛駆除をと地方版 戸田市・蜂巣厚子さん。「天牛」とはカミキリムシ。高山さんは「こういうことを俳句にするのは珍しいし、面白い。中七は字余りだが、これは動かしようがない」と話した。蜂巣さんは後日、朝日俳壇に「秋分の日の特選に酔ひにけり」と投句してくれた。小林さんの特選1席は「月涼し乾くまで待つ青インク 横浜市・秋野晃枝さん」。小林さんは「上五に季語を置く、最も伝統的で基本的な型を生かした俳句。刹那をうまく詠われた」と評価した。この句は、長谷川さんと高山さんが入選句に選んだ。（俳壇担当 西秀彦）

伊藤伊那男句集「狐福」「銀漢」創刊43年の第4句集。「初夢の妻に長生きなどを託ぶ」「老人に浮力ありけり妻を踏む」「浮沈とふ今浮の方か衣被」（北辰舎銀漢叢書・3300円）
なつはづき句集「人魚のころ」第2句集。「蛇いちご母をまっすぐ見られぬ日」「新涼や光を舐める猫の舌」。「あとがき」に「届く俳句が作りたい」（朔出版・2640円）

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 請海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます（※2023年9月30日まで）